

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: 読書 読み取り

年 組 番

少年の日の思い出

氏名



少年の日の思い出

へルマンIIハッセ
高橋 健二 訳

客は夕方の散歩から帰って、私の書齋で私のそばに腰かけていた。昼間の明るさは消えうせようとしていた。窓の外には、色あせた湖が、丘の多い岸に鋭く縁取られて、遠くかなたまで広がっていた。ちよんど、私の末の男の子が、おやすみを言ったところだったので、私たちは子どもや幼い日の思い出について話し合った。

「子どもができてから、自分の幼年時代のいろいろの習慣や楽しみごとがまたよみがえってきたよ。それどころか、一年前から、僕はまた、チョウチョを集めをやっているよ。お目にかげようか。」と私は言った。

彼が見せてほしいと言ったので、私は収集の入っている軽い厚紙の箱を取りに行った。最初の箱を開けてみて、初めて、もうすっかり暗くなっているのに気づき、私はランプを取ってマツチを擦った。すると、たちまち外の景色は闇に沈んでしまい、窓っぱいに不透明な青い夜色に閉ざされてしまった。

私のチョウチョは、明るいランプの光を受けて、箱の中から、きらびやかに光り輝いた。私たちはその上に体をかかめて、美しい形や濃いみどりな色を眺め、チョウの名前を言った。

「これはワモンキンタバで、ラテン名はフルミネア。こちらでは、く珍しいやつだ。」と私は言った。友人は一つのチョウを、ピンの付いたまま、箱の中から用心深く取り出し、羽の裏側を見た。

「妙なものだ。チョウチョを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそえられるものはない。僕は小さい少年の頃熱情的な収集家だったものだ。」と彼は言った。そしてチョウチョをまたもとの場所に刺し、箱の蓋を閉じて、「もう、けっこう。」と言った。

その思い出が不愉快でもあるかのように、彼は口早にそう言った。その後、私が箱をしまつて戻ってくるに、彼は微笑して、巻きたばこを私に求めた。「悪く思わないでくれたまえ。」と、それから彼は言った。「君の収集をよく見なかったけれど、僕も子どもの時、むろん、収集していたのだが、残念ながら、自分でその思い出を汚してしまった。実際話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。」

彼はランプのほやの上でたばこに火をつけ、緑色のかさ

をランプに載せた。すると、私たちの顔は、快い薄暗かりの中に沈んだ。彼が開いた窓の縁に腰かけると、彼の姿は、外の闇からほとんど見分けがつかなかった。私は葉巻を吸った。外では、カエルが遠くからかん高く、闇一面に鳴いていた。友人はその間に次のように語った。

僕は、八つか九つの時、チョウチョを集めを始めた。初めは特別熱心でもなく、ただはやりだったので、やってきたまです。ところが、十歳ぐらいいなくなった二度めの夏には、僕は全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのため他のことはすっかりさぼかしてしまつたので、みんなは何度も、僕にそれをやめさせなければならぬまい、と考えたほどだった。チョウを採りに出かけると、学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、もう塔の時計が鳴るのなんか、耳に入らなかつた。休暇になると、パンをきれ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆り歩くことがたびたびあった。

今でも美しいチョウチョを見ると、おりおりあの熱情が身にしみて感じられる。そういう場合、僕はしばしばいじめ、貪るような、うっとりとした感じに襲われる。少年の頃、初めてキアゲハに忍び寄り、あの時味わつた気持ちだ。また、そういう場合、僕はすぐに幼い日の無数の瞬間を思い浮かべるのだ。強くにおう乾いた荒野の焼きつくような屋下がり、庭の中の涼しい朝、神秘的な森の外れの夕方、僕はまるで宝を探す人のように、網を持って待ち伏せていたものだ。そして美しいチョウを見つけると、特別に珍しいのでなく、たつてかまわない、日なたの花に止まって、色のついた羽を呼吸とともに上げ下げしているのを見つけると、捕らえる喜びにも息もつまりそうになり、しだいに忍び寄って、輝いている色の斑点の一つ一つ、透きとおつた羽の脈の一つ一つ、触角の細いとび色の毛の一つ一つが見えてくると、その緊張と歓喜ときたら、なかつた。そうした微妙な喜びと、激しい欲望との入り交じつた気持ちは、その後、そうしたたびたび感じたことはなかつた。

うち、僕は自分の収集を喜んでたびたび仲間に見せたが、他の者は、ガラスの蓋のある木箱や、緑色のガーゼを貼つた飼育箱や、その他ぜいたくなものを持っていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。それどころか、重大で、評判になるような発見物や獲物があつても、ないしよに、自分の妹たちだけに見せる習慣になつた。

ある時、僕は、僕らのところでは珍しい青いコムラサキを捕らえた。それを展翅し、乾いた時に、得意のあまり、せめて隣の子どもにだけは見せよう、という気になつた。それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。この少年は、非のうちどころがないという悪徳をもつていた。それは子どもとしては二倍も興味悪い性質だった。彼の収集は小さく貧弱だったが、こぎれいなのと、手入れの正確な点で一つの宝石のようなものになつてきた。彼はそのうえ、傷んだり壊れたりしたチョウの羽を、にかれて継ぎ合わすという、非常に難しい珍しい技術を心得ていた。とにかく、あらゆる点で、模範少年だった。そのため、僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた。この少年にコムラサキを見せた。彼は専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十ペニヒぐらいの現金の値打ちはある、と値踏みした。しかしそれから、彼は難癖をつけ始め、展翅の仕方が悪いとか、右の触角が曲がついているとか、左の触角が伸びているとか言い、そのうえ、足が二本欠けているという、もっともな欠陥を発見した。僕はその欠点をたいしたものとは考えなかつたが、こつぱどい批評家のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。それで僕は二度と彼に獲物を見せなかつた。

二年たつて、僕たちは、もう大きな少年になつていたが、僕の熱情はまだ絶頂にあつた。その頃、あのエミールがヤマムガをサナギからかえしたという噂が広まつた。今日、僕の知人の一人が、百万マルクを受け継いだとか、歴史家リヴィウスのなくなつた本が発見されたとかいうことを聞いたとしても、その時ほど僕は興奮しないだろう。僕たちの仲間、ヤマムガを捕らえた者はまだなかつた。僕は自分の持つていた古いチョウの本の挿絵で見たことがあるだけだった。名前を知っていながら自分の箱にまだないチョウの中で、ヤマムガほど僕が熱烈に欲しがつていたものはなかつた。幾度となく僕は本の中のあの挿絵を眺めた。一人の友達は僕にこう語つた。「とび色のこのチョウが、木の幹や岩に止まつている

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: 読書 読み取り 続き

年 組 番

少年の日の思い出

氏名



ところを、鳥や他の敵が攻撃しようとするので、チョウは畳んでいる黒みがかかった前羽を広げ、美しい後ろ羽を見せるだけだが、その大きな光る斑点は非常に不思議な思いがけぬ外観を呈するので、鳥は恐れをなして、手出しをやめてしまふ。」と。

エーミールがこの不思議なチョウを持っていて、このことを聞くと、僕はすっかり興奮してしまつて、それが見られる時の来るのが待ちきれなくなつた。食後、外出ができるようになるので、すぐ僕は中庭を越えて、隣の家の四階に上つていった。そこに例の先生の息子は、小さいながら自分だけの部屋を持っていた。それが僕にはどのくらい羨ましかったかわからない。途中で僕は、誰にも会わなかつた。上にたどり着いて、部屋の戸をノックしたが、返事がなかつた。エーミールはいなかつたのだ。ドアのハンドルを回してみると、入り口は開いていることがわかつた。

せめて例のチョウを見たいと、僕は中に入った。そしてすぐに、エーミールが収集をしまつてある二つの大きな箱を手にとつた。どちらの箱にも見つからなかつたが、やがて、そのチョウはまだ展翅板に載つてゐるかもしれないと思つた。はたしてそこにあつた。とび色のピロロドの羽を細長い紙きれに張り伸ばされて、ヤマユガは展翅板に留められていた。僕はその上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。あいにく、あの有名な斑点だけは見られなかつた。細長い紙きれの下になつていたので。

胸をときときさせながら、僕は紙きれを取りのけた。誘惑に負けて、針を抜いた。すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりは、ずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたという逆らいたい欲望を感じて、僕は生まれて初めて盗み犯した。僕はピンをそつと引っぱつた。チョウはもう乾いていたので、形は崩れなかつた。僕はそれをてのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。その時、さしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

チョウを右手に隠して、僕は階段を下りた。その時、下の方から誰か僕の方へ近づいてくるのが聞こえた。その瞬間に僕の良心は目覚めた。僕は突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟つた。同時に、見つか

かりはしないかという恐ろしい不安に襲われて、僕は本能的に、獲物を隠していた手を、上着のポケットに突っ込んだ。ゆつくりと僕は歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がつてきたお手伝いさんと、びくびくしながらすれ違つてから、僕は胸をときときさせ、額に汗をかき、落ち着きをし、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まつた。

すぐに僕は、このチョウを持つてゐることはできない、持つてゐてはならない、もとに戻して、できるならなに¹ごともなかつたようにしておかねばならない、と悟つた。そこで、人に出くわして見つかりはしないか、ということ²を極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分の後にはまたエーミールの部屋の中に立つていた。僕はポケットから手を出し、チョウを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、僕はもうどんな不幸³が起つたかということを知つた。そして泣かんばかりだつた。ヤマユガは潰れてしまつたのだ。前羽が一つと触角が一本なくなつていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出すとすると、羽ははらはらになつていて、繕つことなんか、もう思いもよらなかつた。

盗みをしたという気持ちより、自分が潰してしまつた美しい珍しいチョウを見ているほうが、僕の心を苦しめていた。微妙な色とび色がかつた羽の粉が、自分の指にくっついてゐるのを、僕は見た。また、ばらばらになつた羽がそこに転がっているのを見た。それをすっかりもとどおりにすることができたら、僕はどんな持ち物でも楽しんで、喜んで投げ出したらう。

悲しい気持ちで僕は家に帰り、夕方までうちの小さい庭の中に腰かけていたが、ついに一切を母にうち明ける勇気を起こした。母は驚き悲しんだが、すでにこの告白が、どんな罰を忍ぶことより、僕にとつてつらいことだつたということを感じたらしなかつた。

「おまえは、エーミールのところに行かねばなりません。」と母はきつぱりと言つた。「そして、自分で言う言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえの持つてゐる物のうちから、どれかを埋め合わせにより抜いてもらうように、申し出るのです。そして許してもらつたら、頼まねばなりません。」あの模範少年でなくて、他の友達だつたら、すぐにそういう気になれたらう。彼が僕の言うことをわかつてくれないし、おそろく全然信じようとしてもしなかつた。

ということ、僕は前もつて、はつきり感じていた。かれこれ夜になってしまつたが、僕は出かける気になれなかつた。母は僕が中庭にゐるのを見つけて、「今日のうちでなければなりません。さあ、行きなさい。」と小声で言つた。それで僕は出かけていき、エーミールは、と尋ねた。彼は出てきて、すぐに、誰かがヤマユガをだいなしにしてしまつた。悪いやつがやつたのか、あるいはネコがやつたのか、と語つた。僕はエーミールを見せたくれと頼んだ。二人は上になつていった。彼はほろほろと泣いて、僕はだいなしになつたチョウが展翅板の上に乗つてゐるのを見た。エーミールがそれを繕うために努力した跡が認められた。壊れた羽は丹念に広げられぬれた吸い取り紙の上に置かれてあつた。しかしそれは直すよしもなかつた。触角もやはりなくなつていた。そこで、それは僕がやつたのだと言ひ、詳しく話し、説明しようと思つた。

すると、エーミールは激したり、僕をどなりつけたりなどほしなないで、低く、ちえつと舌を鳴らし、しばらくじつと僕を見つめていたが、それから「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだ。」と言つた。

僕は彼に、僕のおもちゃをみんなやると言つた。それでも彼は冷淡にかまへ、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は自分のチョウの収集を全部やると言つた。しかし彼は、「けつこうだよ。僕は君の集めたやつはもう知つてゐる。そのうえ、今日また、君がチョウをどんなに取り扱つてゐるか、ということを見ることができた。」と言つた。

その瞬間、僕はすんでのところであいつの喉笛に飛ひかかることだつた。もうどうにもしようがなかつた。僕は悪漢だということに決まつてしまひ、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのやうに、冷然と、正義をたてに、侮るやうに、僕の前に立つてゐた。彼は罵りさえしなかつた。ただ僕を眺めて、軽蔑してゐた。その時初めて僕は、一度起きたことは、もう償ひのできないものだということ¹を悟つた。僕は立ち去つた。母が根ほり葉ほりきこつたこと²をうれしく思つた。僕が床にお入りと言われた。僕にとってはもう遅い時刻だつた。だが、その前に僕は、そつと食堂に行つて、大きなとび色の厚紙の箱を取つてき、それを寝台の上に載せ、闇の中で開いた。そしてチョウを一つ、一つ取り出し、指でこなごなに押し潰してしまつた。

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: ワークシート2

少年の日の思い出

氏名

年 組 番



★客の回想の場面(後半部)

◎「僕」のチヨウチヨ集めに対する熱情ぶりを表している表現

◎「幼い日の無数の瞬間」とは

◎「僕」の環境

・「自分の宝物」とは

・「自分の幼稚な設備」とは

／
／
／

◎隣の子供について

▽名前(後で出てくる)

▽素性(隣の子供の情報)

それは僕からすれば

だった。

あらゆる点で

(少年

そのため)

▽僕から見たエーミールを表す別の表現

◎ヤマユガをさなぎからかえしたという噂うわさを聞いたときの僕

(

つまりとても)

)

◇その驚きの度合いを表現した部分

以上に興奮した。

ヤマユガは、僕が)

(チヨウ

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: ワークシート3

少年の日の思い出

氏名

年 組 番



★客の回想の場面(後半部) 2 ……続き

◇心情の変化を読み取ろう

◎「四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずつとすばらしく、僕を見つめた。」

①a この表現にみられる技法(表現技法)

b この表現からわかる「僕」の心情

②このあと(見たあと)の僕の感情や取った行動

◎ちようをエーミールの部屋から持ち出したときの僕の感情

◎階段を下り、下から上がってくる音が聞こえたときからの心情

• • •
← ← ←

▼お手伝いさんですれ違ってから

◎「なにもこともなかったようにしておかねばならない」とエーミールの部屋に引き返してから
a 「どんな不幸」とは

b その時の僕の気持ち 〈微妙な僕の気持ちがえがいた部分を書きぬく〉

◎母に一切を打ち明けたあと、僕がエーミールのところへ行くのをためらった理由 〈一文中抜き出してみよう〉

から

◎それは僕がやったのだと言い、詳しく話し、説明しようとした。

▽何をわかってほしくて、詳しく話し、説明しようとしたのか

▽エーミールの反応

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: ワークシート4

少年の日の思い出

氏名

年 組 番



◎すんでのところでとはどっぴう意味

◎僕から見たエミール

(僕からはエミールがどのように見えていたのか)

◎僕が悟ったこと

語句)

(=相手をばかにして軽く見る

◎「母が根ほり葉ほりきこうとしないで、僕にキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。」

▽ここからわかる僕にとっての母の存在とは

◎「チョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなこなに押し潰してしまっただ。」のはなぜか。



ヘッセの書き物机

【応用編】

〈片羽根のとれたヤマユガ〉

☆図・挿絵(ヘッセの書き物机の収集)からわかること

◇構成のなぞ(現在↓回想で終わる)

現在の場面の必要性

◇筆者を表す(投影する)登場人物はだれなのか

◎この話の主題は何なのか(筆者は何を述べたかったのか)

ヘッセが一九一一年六月六日に、ミュンヘンの雑誌《青年》に発表した「クジャクヤマユガ」が初稿であるが、二十年後の一九三一年に改稿し、ドイツの地方新聞八月一日号に掲載されたのが「少年の日の思い出」である。

なぜ、一度発表されたものを新聞掲載したかは定かではないが、ナチス台頭のころであり、後に書くことを奪われるヘッセにとっては、迫り来る世の情勢に、何らかの理不尽さを伴う圧力を感じたため、大人も目にする新聞に掲載したのではないかと想像できる。この「少年の日の思い出」は訳者高橋健二氏が直接ヘッセから新聞の切り抜きをもらい日本に持ち帰って発表されたものである。